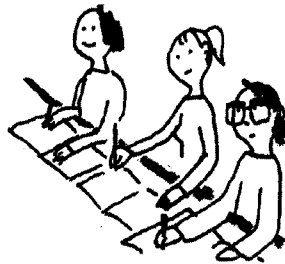


特集

第六十二回日本保育学会から

報告「保育学会を見てきました」

佐藤嘉代子  
児玉理紗  
安田真穂



記念講演「『いのち』の輝き」を聴いて

「小児科医としてのスタートをきった時代は、小児癌はまだ治らない時代で、この子らのために何ができるかを、自分たちで考えなければなりませんでした。自分はまだ大人だけど、ついこの間までは子どもだったから、子どもたちが困っていたら、彼らの立場に立って一緒に困ってあげられるだろう。彼ら

と一緒に何とか解決の方法を見つけてやろうとしていた時のことです」と、小児科医細谷亮太氏による講演は始まりました。

まず、病状が進み、レベル4の小児癌をわずらう六歳の男児Aと、骨折で入院している六歳男児Bとの交流を描いたビデオが上映されました。隣同士のベッドで過ごす二人が互いを思いやる様子に、会場はたちまちくぎ付けになりました。

「夜は寝ないんだ。見てあげてるの、(看護婦さん)を呼ぶから」と重症のA児を思いやるB児。一方、絵本を読んであげようとして、車椅子に移って移動してこようとするとB児に「気をつけてきてね」と声をかけるA児。「何がいい?」と携えた三冊の絵本の中から好きなものを選ぶように尋ねるB児の姿など、さりげないけれどしっかりと支え合う関係が胸を打ちます。

B児が外泊して翌日病院に戻ると、隣のベッドが空っぽでした。「いつから?」と尋ねながら、悲しみをこらえているのがわかります。混乱しつつも葬儀に出てあげたいと、友達の「死」に向き合おうとし、時間をかけて徐々に現実を受け止めていくB児。A児が寝ていたベッド横の窓ガラスの上に、退院の際、ふと見つけたミッキーマウスのシール。姿が見えなくなったA児を思い出すよりどころを得て、心の中に友人の存在を取り戻していく、という

内容でした。

「子どもってどういうものなのか! 六歳になるとこんなにも深いきずなが育まれるんです。医者という仕事は形が見えるけれど、保育はこのような子どもたちを育てることなんです」と細谷氏は話されました。また、自分が勤務する病院の理念に触れ「きちんとしたものは百年たっても二百年たっても揺るがないものです」と話されていました。理念に貫かれる姿勢と、その想いを支える言葉、「変えられないものを受け入れる心の静けさと、変えられないものを変える勇氣と、その両者の違いを見分ける<sup>えい</sup>叡智」と結ばれた言葉が印象に残りました。学会準備委員長の榎沢良彦氏は、「『命を感じ合っている』と感じました。心を感じ合っているところに希望があると思います」と感想を述べられました。「『いのちの輝き』への想いが講演の舞台からあふれ、会場全体に通奏低音のように流れ出していました。

保育制度の大きな変革の渦にのみ込まれそう  
今、たくさんの会場における学びが幅広く交錯し合  
い、個性的で多様な調べとなり、それぞれの音色が  
響き合い、あたかも壮大な交響曲「子どもの詩」が  
奏でられているような印象を受けました。

(佐藤・お茶の水女子大学大学院生)

### 学生の立場から考える保育者養成

初めて保育学会に参加し、その規模の大きさにま  
ずもって驚かされました。これほど多くの方が保育  
や子どものことについて考えているのだということ  
を体全体で感じ、これならきつと未来の子どもたち  
は大丈夫だと樂觀的な気持ちになりました。

私は保育者養成に関するシンポジウムを二つ聞き  
ました。一つは、新幼稚園教育要領と新保育所保育  
指針を踏まえた保育者養成の課題について考えるシ  
ンポジウム。もう一つは、職業的保育者養成に特化

しない「総合的保育者養成」のあり方を提案するシ  
ンポジウムでした。私は学部で幼稚園教諭免許を取  
得し、今年の四月から大学院で学んでいます。この  
保育学会で保育者養成について考える機会を得たこ  
とは、大学四年間で学んできたことを振り返り、そ  
の学びを私なりに消化し位置づけることだと感じま  
した。

二つのシンポジウムを聴き、大きく三つのことを  
考えました。一つ目は、保育をする学生に、生きる  
力や生活力といったものが欠けているという問題に  
ついてです。子どもが抱えている問題と学生が抱え  
ている問題は同じだという話もありました。確かに  
そうかもしれません。私自身、保育実習で出会った  
子どもと自分を重ね合わせて考えることは何度かあ  
りました。しかし、だからこそ感じられる子どもの  
思いがあり、子どもの肩に重くのしかかるものに、  
より近くから思いをはせることができるという可能

性はないでしょうか。今のこの時代を生きる子どもたちと似た社会の中で育ってきた学生だからこそ感じるような気がすると思います。

二つ目は、学生と大学教員、そして学生と実習先の保育者の間に結ばれる保育的関係についてです。これはまさに私が四年間で感じてきたことでした。授業で保育を学び、実習先では子どもとじかに触れ合いそこから保育を考えます。それはいつも保育をする側からの学びです。しかし、学生が、授業や実習の中で大学教員や保育者から受け取り経験してきたものは、保育そのものであったように思います。学生は保育をする体験と同時に保育をされる体験をしているのです。たとえば、大学の先生や保育者に対して自分のどんな話しても、耳を傾け、受け止めてくれるという安心感がありました。それは、子どもが日々の生活の中で感じている保育者への安心感と同じようなものだと思います。保育をされる体

験をすることで、学生は保育を肌で感じるようになります。保育をする側とされる側両方を体験できるのは学生の貴重な体験の一つであると思います。

最後は、保育者養成における学生の声についてです。学生は大学の保育者養成カリキュラムに沿って学んでいきますが、学生の学びはそこで終わりません。授業や実習の中で先生や保育者から聞いた言葉は、その後、自分自身の文脈の中で再構築されていきます。「あの時言われたことはこういうことかもしれない」と自分なりに思い返し、記録や考察、論文などを通して学生自身の声としながら、もう一度意味を塗り変えていくことが、私にとっては本場の学びであったように思います。学生の学びがその場の一度きりのものでなく、省察され再構築された時に、それを言葉にし、共有できる機会が必要なのではないかと今思います。

初めての保育学会は、過去を振り返り自分なりの

再構築をしていく、そんな時間であったように思います。

(児玉・お茶の水女子大学大学院生)

### 初めての保育学会へ大切なきっかけ

今回初めて参加した保育学会は、私にとつてとても刺激的なものでした。今まで大学の中でしか保育を学んでいなかった私は、保育学会という、全国から保育を学ぶ人々が集まる場所に行くということだけで少し緊張していました。会場の千葉大学に着くと、こんなにも多くの人が日本で保育について学び、研究に真剣に取り組んでいるのだということを感じて実感しました。

そのように始まった保育学会でしたが、たくさんの発表の中から何を聞こうかと思った時に、やはり、今自分が保育実践を体験している身として、それに関する発表に接してみたいと思いました。私は

今、公立幼稚園で非常勤講師として特別保育児の保育を担当しています。そこで、「口頭発表D(10) 障害児保育・障害のある子どもを含む保育3」の分科会を聴いてみようと思いました。その中で、最初に発表された芳野正昭さん(佐賀大学)の「障害幼児の気持ちに寄り添い自分で決めることを協力した保育実践―活動の切り換わりを促した場面から―」という発表に興味をもちました。

この研究に出てきた事例が、現場で保育をしている今の私にとつて、とても啓発されるものでした。その事例とは、障害をもつ三歳児Rと保育者とのかわりを観察したもので、Rが好きな遊びから、お弁当を食べるということに気持ちを切り替えるという場面でした。保育者がRをお弁当に誘いに来るのですが、Rは最初のうちは遊びに没頭していて動きません。そこで、保育者がRの遊びに参加しながらタイミングを見ては誘い続けます。それによって、

Rが保育者の誘いを自分なりに受け止め、自分の意  
志でお弁当を食べることを選んだという事例でし  
た。芳野さんはこの事例から、Rはこの保育者のか  
わりの中で内的社会化を行って、そこにはR  
の自力に対する保育者の信頼があるとおっしゃって  
いました。

私はこの事例を聞いて、すぐに自分の保育と結び  
つけていました。私もその時、いつも一緒に過ごし  
ているMが、気持ちを切り替えるのが難しいことで  
悩んでいたからでしょう。Mが自分で気持ちを切り  
替えるのを待ちたいという思いをもちつつも、幼稚  
園の生活の中ではそこまで時間の余裕がないことも  
あり、私が無理矢理Mを連れて行くということがよ  
くあったのです。私は毎日その葛藤をもち続けてい  
ました。しかし、この事例を聞いて、私はとても前  
向きになれたような気がしたのです。「どんな状況  
であろうとも、やっぱり子どもの力を信頼するとい

うことを大切にしていけばいいのだ」と思えたから  
です。「子どもの力を信頼する」ということは保育  
者ならば誰もが大切にしていることでしょう。で  
も、そのような当たり前のことも、こうやって一つ  
の事例になることよって改めて考えさせられ、再  
確認できるのだと思いました。

たった一つの事例とはいえ、私にとっては救いと  
なる事例でした。私たちは日常の保育の中でさまざ  
まに葛藤し、いろいろなことを考えます。その中で  
発見するものもあれば、忘れてしまうものもありま  
す。しかし、実践を続けていくためには、何かの  
きっかけによって、それを考え直したり、取り戻し  
たりすることが必要です。私にとって今回の保育学  
会はその大切なきっかけでした。保育学会にはそんな  
大切なきっかけがきつとたくさん転がっているの  
だろうと思いました。

(安田・お茶の水女子大学大学院生)